（様式２）【ホームページ掲載用】

研究課題（テーマ）	筋萎縮性側索硬化症患者の介護者が持つ卓越したコミュニケーション技術の要素分析		
研　究　者	所　属　学　科　等	職	氏　　名
代表者	看護学部　基礎看護学講座	講師	山本　麻理奈
分担者	工学部　　電子・情報工学科	教授	鳥山　朋二
	看護学部 基礎看護学講座	助教	岩崎　涼子
	看護学部 基礎看護学講座	助手	堀田　美沙
	看護学部 基礎看護学講座	教授	岡本　恵里

研究結果の概要

【目的】

ALS（筋萎縮性側索硬化症：手足・のど・舌の筋肉や呼吸に必要な筋肉がだんだんやせて力がなくなっていく病気）を抱えて生活する患者の介護者のコミュニケーション技術を分析し、有効なコミュニケーションを図るための技術の要素を明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

対象は、ALS 患者の介護場面で「文字盤」を使用する介護者 20 名。

最初に「文字盤」を使用したコミュニケーションの構成要素を検討した。その上で、介護者の視線の送り方、視線の順序、視線がとどまる位置やその時間などを、視線計測装置を用いて計測した。同時に介護者がどのように「文字盤」の傾きや位置を決めているか、「文字盤」を動かす速度について、デジタルビデオカメラおよび「文字盤」にセンサーとマーカーを装着して計測した。計測後には個別にインタビューを行い、文字盤を使用する時の工夫について質問した。

【結果】

当初、対象者は 20 人を予定していたが、富山県・石川県で「文字盤」の使用者が少なかったこと、調査期間に新型コロナウイルス感染症が拡大し、呼吸器を使用する患者の安全性に配慮した結果、調査参加者は 3 名であった。いずれも同一患者（60 歳代、男性）に実施した。

対象者の属性を下表に示す。

属性	介護者 1	介護者2	介護者3
年齢、性別	60 歳代、女性	40 歳代、女性	40 歳代、女性
患者との関係	患者の配偶者	看護師	看護師
文字盤の使用歴	8 年	4 年	7 年

視線計測装置の測定結果から、介護者が見せる表情が、「文字盤」を使ったコミュニケーションの構成要素の 1 つである“読み取り精度”に影響を与えていることが分かった。またインタビューから、患者に向き合う集中度、余裕をもって患者との時間を共有する姿勢などが読み取り精度を左右していることが示唆された。

今後の展開

今後は、2019 年度に引き続き「文字盤」を使用する介護者への調査を蓄積していくことで、卓越したコミュニケーション技術の要素が抽出できると考える。2020 年度は抽出した卓越したコミュニケーション技術の要素を元に「文字盤」使用の初心者にモーションキャプチャを使用した熟達者との技術の比較を試みる予定である。最終的には、技術の修得プログラムを作成してその効果を検証する。